

# タックル(斗争心)にあけくれた昭和25年

## 第7期 杉本要二

終戦後5年目の昭和25年我々7期生が最上級生となり、記念すべきシーズンが始まった。部員構成は、小林幸四郎主将以下3年生11名、2年生7名、1年生5名の総勢23名であった。3年部員は、主将小林幸四郎(CTB)、副主将清水浩(No.8)、須藤薫穂(PRP)、工藤満男(FL)、高瀬勤郎(LO)、杉本要二(SH)、高沢公夫(SO)、山本裕章(WTB)、渡部徹(FB)、芹沢三郎(WTB)、北見勝哉(WTB)。

当時の年間大会は、春の憲法記念大会、秋の国体予選、冬の全国大会の三大大会があり、夫々の大会に焦点を合わせて夏合宿を行い、又他校との練習ゲームを行った。特に夏合宿は前年のかの有名な土浦合宿を経験しているだけに再度との思いもあったが種々の事情もあって結局、八幡山の明大Gをお借りしての通い合宿を実施した。この合宿はOBの援助は一切なしであったが小林主将以下しっかりとまとまった効果的な合宿であった。

### 次に各大会の戦績

#### [憲法記念大会]

- 4/23 千歳高46-0日大二高(八幡山)
- 4/29 千歳高16-6都大森(八幡山)
- 5/3 千歳高16-3城北(八幡山)
- 5/7 千歳高13-9都豊多摩(八幡山)

優勝して前年の屈辱を果たした、さいさき良い優勝で絶好のスタートをきった訳である。

#### [国体予選]

当時の国体出場校は全国で8地区の代表で、我々は関東地区代表を争ったのである。

#### (都予選)

- 9/3 千歳高54-0都小山台(下高井戸日大G)
- 9/10 千歳高14-3都大森(下高井戸日大G)
- 9/17 千歳高38-0日大二高(八幡山)

#### (決勝戦)

- 9/24 千歳高33-0青山学院(八幡山)
- (関東大会)

- 10/1 千歳高15-0埼玉本庄高(本庄高)
- (関東地区決勝)

- 10/8 千歳高3-6群馬高崎高(秩父宮ラグビー場)

秩父宮ラグビー場での国体関東地区決勝戦で、創部以来の宿敵、高崎高に3-6の僅差で涙をのみ、直後に行われた修学旅行(京都・奈良)の途中、名古屋を通過した際に見た「歓迎・名古屋国体」の垂れ幕、提灯に再度悔しい思いをさせられ、改めて全国大会は絶対勝ち取るぞと誓いを新たにしたい出が、強烈に甦ってくる。

#### [全国大会]

国体終了後、今年より全国大会はその参加校を従来の8チームより16チームに倍増される事となり、東京地区が新設され、都代表一校が全国大会出場権を得る事となった。

#### (都予選)

- 11/25 千歳高32-0法政高(八幡山)
- 12/2 千歳高6-3成城学園(八幡山)
- 12/10 千歳高8-0都豊多摩(八幡山)

一回戦は法政高に32-0と楽勝したものの、二回戦以後は苦戦の連続であった。対成城学園戦は互いに手の内を知り合った仲であったので、スコア(6-3)程苦戦感はなかったが、準決勝の対豊多摩高戦は本当に苦しかった。12月10日という時期は、もう真冬なみに冷

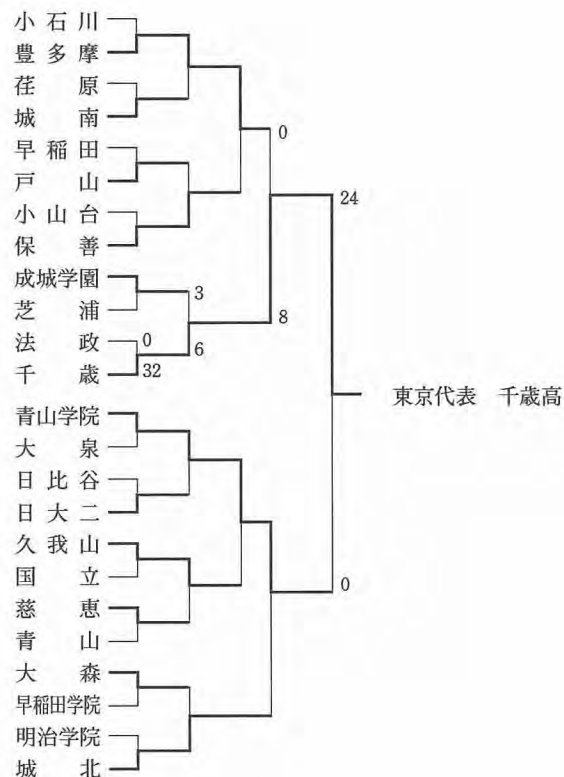
え込み、八幡山グラウンドは霜柱が立ち、加えて豊多摩高は重量を誇るFWでぐいぐい押し込んで来るタイプであったので、当日冷え込みが厳しく、大量に霜が降りたなら、霜どけと重なって軽量の千歳FWはたちまち、ずるずる後退を余儀なくされるであろうという戦前の予想であったが、何と幸いにも前日から温暖な気温で軟弱なグラウンドコンディションだけは取り除かれたものの、さすがに豊多摩高も強く、前半は0-0、重苦しい雰囲気の後半に入った。その後半FWの集散にやや千歳がまさり、タイミング良い球出しからボックスが一気に突進し、遂に得点。その後も勢いを持續して加点、8-0のスコアを以って難敵豊多摩をくだした。

(決勝)

12/16 千歳高24-0青山学院(秩父宮ラグビー場)

当日は、曇天ながら絶好のコンディション。午後1時のキックオフには全校生徒の応援を得て勇躍試合に臨んだ。青学とは国体予選四回戦で当たり、33-0と完封しているので気分的に優位に立て、その上前週、強敵豊多摩を破った自信もあり、割合い楽に試合を進め結果は24-0で再度青学を完封で破り、待望の全国大会へ昭和24年に続いて二度目の出場を決めたのである。

○東京予選



全国大会は新制高校制度になってから三回目の大会。この第三回大会に駒を進めてきた全国15地区代表は下記の通り。

北海道-北見高、青函-高松高、東北-金足農高、北陸-富山南部高、関東-高崎高、東京-千歳高、東海-一宮高、東近畿-同志社高、大阪-天王寺高、西近畿-村野工高、中国-崇徳高、四国-川島高、北九州-嘉穂高、西九州-佐賀高、南九州-甲南高、そして、前年度優勝校の秋田工高の16チーム。

[第三回 全国ラグビーフットボール大会]

昭和26年1月1日～7日(西宮球技場)

12月29日夜行列車(鈍行)で大阪へ出発。出発前、冬休みに入る直前、体育館で全校の激励会があり、対戦する大阪代表天王寺高に対し激しい斗志を抱いたのを憶えている。天王寺高は下馬評では優勝候補の最石翼、まさに相手にとって不足はない。あわよくば…とチーム一丸となつての大阪入りであった。

明けて昭和26年元旦、8時30分からの開会式後の第一試合が東京対大阪の組合せである。強風ながら晴天、対戦した天王寺高は確かに強かった。長身ロックの木下を擁したFWは重く、竹尾・青井のハーフ団の動きは超高校級であった。しかし千歳高のFWはその集散に一歩もひけを取らずにシャープな動きを見せ、ボックスも又伝統のハードタックルを随所に見せて立ち向かい前半を3-8と折り返した。しかし後半に入るや、やはり総合力で一枚上の天王寺にじわじわと押され0-12と差をあげられて結局3-20で我々の全国大会は終了した。試合については全力を出し切った満足感で一杯。涙などみじんもなく、天王寺フィフティーンとの語らいも和気あいあいですっかりうちとけ、これが後年二度程行った天王寺高とのOB戦につながった因であったと思う。

只、奇しくも二度出場した全国大会での対戦相手がいずれもその年の準優勝(24年四条畷高)、優勝(26年天王寺高)チームであった事も何となくうなずける事に思う(多少自己満足も含めて…)

全国大会出場を良き思い出として、昭和25年度のシーズンを終了し、3月、後を佐々木主将以下に託して学窓を巣立ったのである。

<昭和25年度各大会決勝戦出場メンバー>

○憲法大会(5月7日)

太田	上山	前田	矢部	小林(浩)	工藤	清水	杉本	高沢	山本(横山)	佐々木	小林(幸)	渡部	愛甲
└──────────┘						└──┘		└──────────┘					
FW						HB		TB			FB		

○国体関東地区(10月4日)

太田	愛甲	上山(正)	前田	高瀬	小林(浩)	工藤	清水	杉本	高沢	横山	佐々木	小林(幸)	渡部	芹沢(三)
└──────────┘						└──┘		└──────────┘						
FW						HB		TB			FB			

○全国大会(12月16日)及び本大会(昭和26年1月1日)

太田	愛甲	上山(正)	前田	小林(浩)	工藤	清水	杉本	高沢	横山	佐々木	小林(幸)	芹沢	渡部	本山	山田
3年	2年	2年	2年	2年	3年	3年	3年	3年	3年	2年	3年	3年	3年	1年	1年
└──────────┘						└──┘		└──────────┘							
FW						HB		TB			FB	補欠			

第 7 期  
同期生からのことば

還暦も過ぎた今、振り返れば、一番苦しかったが、面白かった時だったかも知れない。当時の皆に逢いたいものだ。 工藤満男

ラグビーのためだけに通った高校。タックルに男の意気を感じ、勝つ事をめざして皆で競って練習に励んだ毎日が懐かしい。

山本裕章

昭和二十四年一月一日。新設された東京ラグビー場で第一回全国高校ラグビー大会が始まりました。中学ラグビー大会から通算二十八回大会ですが、新制高校になり名称が変わりました。全国八ブロック代表が出場しましたが、千歳高校も関東代表として創部以来の悲願を達成したのです。

戦後、四期相馬さん、五期吉田さん達予科練等から復学した生徒が軍隊時代に突撃精神の昂揚の為とり入れていたラグビーを敗戦により活力が無くなった学生生活に再び希望を持とうと始めたラグビーでした。

戦後「なにか」を求めている少年達でしたから部員も多く、私が亡くなった全君と一緒に入部した中二の時はチームが三つも出来、練習試合をやっていた記憶があります。

五期吉田さんが高三になった時、私は高一の時新学制の為、高三にならず大学進学等で卒業された人が多く、部の中核になる先輩

達がいなくなりました。三年生は主将吉田さん、副将角田さん、川鍋さんの三人になっていました。部員が大幅に少なくなりましたが、残った一年生、二年生達と心を合わせ三年生吉田主将を中心に小柄ながら実によく纏まった強いチームが出来上がり関東全県では高崎高校以外敵なしの強さでした。

吉田さんは俊足好守で相手チームから「カラス天狗」と恐れられボールを持って敵陣突破しトライする姿は今でも記憶しています。

全国大会の事は四十八年前のことであり記憶がありません。第一回戦は四条畷高校と対戦し9対0で負けましたが、代表になるまでの苦しみがあった為か負けても悔しさはさほどなかった様でした。しかし、この大会の成績をみると脇町高(四国)15対0一宮高(東海)、秋田工(東北)15対3修猷館高(九州)、北見高(北海道)14対11崇徳高(中国)、決勝戦秋田工13対3四条畷(関西)。これをみると我が千歳高ラグビー部の実力も全国レベルであった様です。

三年生三人、二年生五人、一年生七人の十五名のチームでしたが、目標に向かって練習に、試合にと毎日が充実した日々を送れた事は人生の中で大変有意義でした。

この後高三の時、第三回大会に東京代表になり、この間千歳高校ラグビー部の全盛期でありました。再びラグビー部が復活し、「三回目なんじゅうねんぶり」の出場をされる事を期待したいと思います。

おわりに当時のチームの亡くなられた方のご冥福をお祈りいたします。(六期藤江さん、井野さん、七期木村君、石津君) 清水浩

<昭和25年12月17日付 朝日新聞>

<昭和25年12月15日付 スポーツニッポン>

# 若さの青学、老巧千歳

## あす高校ラグビー東京代表戦

日本ラグビー協会の毎年新聞に上通振りを記しているが、元低タイの押しで青学FW優勝社後援全国協会のラグビー大会東京地区代表は昨年あたりから注目を集める。このため向地区代表は定戦は十六日午後一時、目ざされていたのに、全国大会予選では恐らく激しいFW戦で火ぶたから東京ラグビー場を挙行され、FWにおおむね勝れ、戦前の予想とは多摩高城な形をFWの進歩が止まっている。北高、保崎高、日本二高など優勝千歳FWは若坊バックロー工勝が勝地を付けていたが、ついに、おこなう対法戦、成学戦とも決戦は千歳と青学の対戦となつ、拙戦し前途を危まれたが、解決、両軍を比べると千歳はFWより勝つては多摩高FWの集約の感も、りもバックのチーム、青学は最近バックの弱さを助けられ、個々のFWの第一線が強化され、一戦毎、鋭い突進を試合をもにしながら、にFWの力戦とまきまきでしり上、決勝では得意のFWの早い集約と

千歳のTB、佐々木、小林(主守)はうま味こそ見えないが、攻守共に備美なプレーを身につけているのに、青学HB田中、ずい、FBはダッシュもせず、フェイント等の小細工をうけていたのは千歳のTBのデフェンスラインにうまくまがが、引つかけてしまふ

千歳はFWのつくるわすかのチャンスを生かし、強い洋次のサイド・ホールを運ぶものが、青学も佐藤、高橋のTBが中堅突破を試みるがこれが成功すれば、青学は勢ついて来て強くなるが、一戦中のタックルを忘れるとバラバラにくずれ、青学は何としても勝ちたいところだけにこれまた元気で真止面から八人のFWがまきまきでぶつかつて行く勝負は何方へなるかが予測出来ない、ともあれ、両チームとも闘志と試合上手を知られているだけに決勝戦にさきむし、熱戦が展開されよう(高橋米吉)

# 千歳高、青学大、東芝勝つ

## ラグビー関東地区決勝

新報大  
東京新聞

関東、東京の代表を決定するラグビー、全国新報大関東地区決勝青学大対日本大、全国高校東京地区決勝千歳高対青学高、全国実業団関東地区決勝東芝対日立山崎の三試合は十六日午前十一時半から東京ラグビー場で行われ、新報大は青学大が日本大後半懸命の反撃をしり受け初出陣を獲得、高校は千歳高が青学高を完封して二回目の代表となり、実業団は東芝後半の追込みをいって日立を撃破して連勝三回の出場となった鈴木庄二は快勝するところとなった

千歳高 24比10 青学高  
 風上陣した千歳は前半10分、後半を改めたドリブルから左ウイング横山がトライ先取点をあげ、続いて20分ラインアウトからFWバスでトライ、1PGを得ては10分、青学からリドを奪った。後半青学は種目し10分、スラムトライの絶好のチャンスを通し、その後、精彩を欠き、17分前田、22分杉本、下ライを許して千歳の千歳高021比13、青学高000比210、PG反

林村木田藤里田村中 藤橋林  
 小岡給松山田吉田 紀 佐高小  
 FW(青学高東京)HB TB FB  
 田甲田田中越水藤本山木原が辺 小林  
 太塚山前田小清上杉高橋佐小菅渡

にわたり合ったものの青学は集り、後半ルーミスで頑張ったものの実力、勝負如何ともし難く千歳の専門に、屈した、勝つた千歳の闘志みなき、不発射したプレーは称賛される、しかし、南大会に出場するにはFW陣の強化、ハーフ陣の球離れを、よくし、奪まれたバックスを走らせ、るまうに、はなるまい



